

研究発表

「松本清張…メディア・アダプテーション・ミドルブラウ文学」

十重田裕一

はじめに

第二十二回松本清張研究奨励事業に入選し、志村三代子氏（日本大学教授）、斉藤綾子氏（明治学院大学教授）とともに、「松本清張文学のメディアミックスに関する基礎的研究」という研究事業を行う機会をいただきました。その一環として、今日報告する国際シンポジウム「松本清張…メディア・アダプテーション・ミドルブラウ文学」をカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）で、二〇二〇年二月十四、十五日に開催しました。志村氏、斉藤氏にも参加いただき、研究奨励事業の成果とすることができたのは大変良かったと思います。

この国際シンポジウムの特色は三点ありました。

第一点目は、北米における最初の本格的な松本清張のシンポジウムになったという点です。北米だけではなくヨーロッパ、東アジアからも参加者があり、世界的に充実したシンポジウムになりました。

第二点目は、発表内容の充実が清張研究を大きく進展させたことです。これは大きな収穫です。

第三点目は、オーディエンス（聴衆）の反応が良かったこと。大学や大学院の授業で松本清張を取り上げたいとおっしゃる教授も複数いらっしゃいました。松本清張は東アジアではかなり翻訳が進んでいます

が、英語圏ではそれほどなく、今回のシンポジウムが清張文学を英語圏に伝える一つの契機になるのではないかと思います。これも今回のシンポジウムの意義と言えます。

メディア・アダプテーション・ミドルブラウ文学

マイケル・エメリック氏（UCLA教授）、田中ゆかり氏（日本大学教授）と清張の文学を捉える上で三つのキーワードを考え、「松本清張…メディア・アダプテーション・ミドルブラウ文学」というタイトルを設定しました。

松本清張は高度経済成長期にメディアが

大きく展開していく中で活躍した。そう捉えることが、文学研究だけではなくメディア研究、あるいは日本国内にとどまらず海外での研究においても、重要な意味を持つと考え「メディア」を入れました。

また、清張文学の多くは映画化、テレビドラマ化されている。つまり、他のメディアに転換しながら表示されていく力がある。そこから「アダプテーション」改作・脚色」という概念を入れました。

最後に、松本清張には中間的な、あるいは民主的なイメージがあります。これをハイブラウではない「ミドルブラウ」という言葉で表現しました。

シンポジウムの構成は、研究発表が九つ、映画上映、翻訳者による朗読と大規模なものでした。カリフォルニアで清張文学の魅力方を北米の方々に伝える試みでしたが、実際にはヨーロッパや東アジアからの参加者もいましたので全世界に伝えることができたとと思います。

シンポジウムの内容を少し紹介します。

金ヨシロン氏（大妻女子大学専任講師）は「東京裁判」法と文学」という視点から清張文学を捉え、魅力的な発表をされました。オーディエンスも多かったです。

フランスの代表的な日本文学研究者である坂井セルシ氏と、このプロジェクトの企画者である田中ゆかり氏との対話もありました。

また、清張文学の代表的な映画化作品「張込み」のスクリーニング（上映会）は大変好評で多くの方がお運びくださいました。

松本清張の光と影

私は企画者ということもあり、シンポジウムの冒頭「松本清張の光と影」と題し、松本清張の全体像について発表しました。このシンポジウムのフレームを、理解いただくのにちょうどいいので紹介します。テーマは「高度経済成長期アダプテーション

の状況（映画化・テレビドラマ化）」です。

序

北米の方々に、松本清張がどういう立場から創作した作家だったのか伝えるべく、まずは川端康成と松本清張の写真を並べて示しました。

川端康成は、世界的に有名な作家の一人です。北米でも、サイデンステッカー氏やドナルド・キーン氏のような紹介者がおり、非常に人気があります。日本人として初めてノーベル文学賞を受賞したことも知られます。それに対して、松本清張は英語圏ではあまり知られていない。しかし、この二人を対比的に示すことによって清張の魅力が伝えられると考えました。

川端康成には「美しい日本の私」というノーベル文学賞を受賞した際の講演があります。しかし、松本清張は「美しい日本の私」だけではなく「美しくない日本の私」も描いた。つまり、川端は雪月花のような

日本の美を象徴的に描く小説を多く書きましたが、清張はむしろ日本の暗部というが、日本の美しくない部分にメスを入らせて書いた。そういう点で、対比的だったと思えます。

清張は川端康成を意識していたのではないかと思います。藤井淑禎氏（立教大学名誉教授）が「伊豆の踊子」と「天城越え」の関係について、優れた論文を書いているように（藤井淑禎『清張 闘う作家』ミネルヴァ書房、二〇〇七年六月）、清張は川端の裏バージョンを意識して創作していたのかもしれない。

清張文学のそれほど多くない英訳作品の一つが、およそ二十年前に刊行された「砂の器」です。原作の発表よりも随分遅れて翻訳されました。タイトルは「刑事今西 (Inspector Inanishi Investigates)」。刑事今西が調査をするストーリーがそのまま表されています。表紙には日本の夜の社会、夜の世界を示すような象徴的な写真が使わ

れています。

発表要旨

続いて私の報告のアブストラクト（要旨）を示します。

日本が敗戦とアメリカ軍による占領を経て、高度経済成長期を迎える時期、松本清張はどのような文学活動をしたのか。マスメディアの発達とともに映画、テレビでどのように清張の作品が活用され、広く普及していったのかを考察しました。

日本の高度経済成長とともに、清張文学がどのように普及したか、映画化・テレビドラマ化との相乗効果によって、いかに民衆の人気を博したかをたどることが発表の目的でした。

松本清張のデビューと

占領からの解放

まず、アメリカとの関係を示すため、松本清張がアメリカによる日本占領が終了しようとする時期に四十歳を過ぎてデビュー

したことを話しました。「西郷札」は一九五一年三月、「或る『小倉日記』伝」は一九五二年九月に発表されます。「或る『小倉日記』伝」は、初め直木賞候補になり、その後芥川賞に回されるという、稀有な経緯で第二十八回芥川賞を受賞しました。「ミドルブラウ」ということも関連しますが、清張文学は直木賞的な側面と芥川賞的な側面の両方を持つている。それが魅力的で、おそらくこれからも世界にマッチしていく要素になるだろうと考えます。

なお、芥川賞の受賞にあたっては、川端康成が選考したことも興味深いと思えます。清張と川端の関わりは日本の近代文学を考える上で対照的でもあり、また重なる部分もあるのです。

一九五〇～六〇年代の

松本清張の出版ブーム

続いて一九五〇年代から六〇年代についてです。一九五〇年代後半に『点と線』『眼の壁』がベストセラーとなります。『昭和

史発掘』の単行本売上は三百万部を超え、

一九六九年にはカッパ・ノベルス版の著作の発行部数が一千万部を突破しました。清張の文学は文字通りのミリオンセラーであり、当時いかに多くの読者にアピールした



十重田裕一氏の発表「松本清張の光と影」
(2020年2月14日、カリフォルニア大学ロサンゼルス校)

かということ、米国、ヨーロッパ、東アジアの研究者に伝えました。

その文学の特徴は秘匿された事実と隠蔽された日本の歴史を暴くことにあり、今読んでも魅力的です。

高度経済成長期には多くの文学全集が出版され、それに伴いさまざまな内容見本が出されました。日本を代表する作家の写真と代表作が、それぞれの出身地に掲載される「文学地図」が作られた時代でした。

日本の文学全集が日本列島との関わりのもと定量的に示され、例えば、それを積み上げたら、富士山よりもこれだけ高いということを示す広告が出されたりします。その中で松本清張が大きく貢献していたということを示しました。

一九六二年、中央公論社が全八十巻から成る文学全集『日本の文学』を企画しました。ここに、松本清張の作品を収録することが検討されましたが、三島由紀夫の反対がかなわなかったという「事件」がありま

す。非常に象徴的な事件で、現在、北米で清張作品があまり翻訳されず読まれていないという現状にも繋がってくるのではないのでしょうか。

編集委員に名を連ねていたのは、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫、それからドナルド・キーン氏などです。谷崎、川端、三島の三人はBIG3と呼ばれ、北米あるいは英語圏で最も翻訳されている、最も有名な日本文学作家です。

現在は状況も変わってきていますが、当時はこれらの作家の作品がある種の聖典だったことを確認しました。

しかし、今回のシンポジウムで、清張の魅力に気付かれた方がたくさんいらっしゃいましたので、状況はますます変わっていくのではないかと思います。

松本清張原作の映画化

次に映画との関係を考えます。一九五〇年代、「羅生門」「源氏物語」「西鶴一代女」「雨

月物語「地獄門」などの映画が次々に制作され、それぞれがベネチアやカンヌといった国際映画祭で高い評価を受けました。日本映画の国際化を考える上で重大な転換点です。たいへん興味深いのは、これらすべてが日本文学を題材とする映画であったこととです。

①一九五〇年代

日本映画が相次いで国際賞を受賞する中、清張作品の映画はどうだったか。五〇年代だけでも八作品が映画化されています。(「顔」「張込み」「眼の壁」「共犯者」「影なき声」「点と線」)「かげろう絵図」「危険な女」※原作「地方紙を買う女」デビュ間もない時期に、これだけ制作されたのはやはり驚くべきことです。制作会社も松竹、東映、日活など複数にわたりますが、とりわけ松竹が多かったようです。一九五八年には一年のうちに五作品が映画化され、多彩な映画監督が清張ものを手がけています。この活況は、今見ても興味深いことです。

②一九六〇年代

一九六〇年代になるとより増えて十四作品が映画化されました。中村登、野村芳太郎をはじめ、優れた映画監督たちが清張ものを取り上げていく。「けものみち」「霧の旗」など清張の代表作も映画化されました。「考える葉」(一九六二年、東映東京、佐藤肇監督)「風の視線」(一九六三年、松竹、川頭義郎監督)「花実のない森」(一九六五年、大映、富本壮吉監督)など、清張作品におなじみの「黒」や「影」のイメージだけでなく、自然の風物が入っているものも多い印象です。

「黒い画集」シリーズ(一九六〇―一九六一年、東宝)や「黒い樹海」(一九六〇年、大映、原田治夫監督)が日本の暗部を描き、高度経済成長期の影を見据える清張の特色を示すほか、「無宿人別帳」(一九六二年、松竹、井上和男監督)も日陰の存在にスポットを当てる清張の特色を出しています。「黒い画集」のシリーズ化は、清張の映画のイメージ

を形づくりました。隠蔽された事実の暗部を暴く特色が、サラリーマン層の人気を博します。

③一九七〇～八〇年代

七〇年代にも「砂の器」(一九七四年、松竹、野村芳太郎監督)をはじめ優れた作品があり、松竹の制作数がより多くなります。その後、映画は斜陽の時代を迎え、映画産業全体が衰退していくにもかかわらず、八〇年代半ばまで清張ものは順調に一定数が映画化されました。これも清張作品の映画の特色の一つです。

全体を通して松竹の野村芳太郎監督との組み合わせが多く、八作品を数えます。

*

映画化の回数は一九六〇年代を頂点に、徐々に右肩下がりとなりますが、七〇年代、八〇年代にあっても他の作家と比べるとかなり多い印象です。九〇年代以降はかなり減っていますが、これはやむを得ないのかもしれない。

清張作品の映画化がもたらした重要な視点に、松本清張の代表作とツーリズムとの関係があります。シンポジウムでスクリーンングした「張込み」が理解しやすい例になります。「張込み」という映画の制作には、佐賀市がよく協力しています。県や市などの各地域が映画産業と結びつきながら協力関係を結ぶ。映画化とツーリズムは不可分に結びついています。

「点と線」だと東京、福岡。「ゼロの焦点」なら信州、北陸。「砂の器」では東京、島根、石川、大阪と日本各地をたどっています。

それが清張作品の特色であると同時に、取り上げられた各地域は自分たちの魅力を再発見していったのでしよう。松本清張の代表作の舞台となった土地は観光資源としてそれを利用して、また、その観光地を通じて作家と作品が広告されていく。その循環があつたと考えます。清張文学の国内各地域における受容は、その循環と密接に結び

ついています。

高度経済成長期を背景に進行した交通網の整備、出版・映画・テレビといったメディアの拡大が相まって、サラリーマンを中心とした層に人気を博していきます。

映画の話はじめて紹介した日本映画の国際化に対して、清張の映画作品は日本国内でドメスティックに受容された側面が強かったのではないのでしょうか。

松本清張原作のテレビドラマ化

テレビドラマは五百二十四件(発表当時、テレビドラマデータベース調べ)確認できました。

年代別に整理すると五〇年代は二十作、六〇年代が百四十六作、七〇年代が五十七作、八〇年代が百二十作、九〇年代が六十三作、そして二〇〇〇年代が五十九作、二〇一〇年代が五十八作となります(注)。

六〇年代と八〇年代が非常に多い。注目すべきは、減つても五十作前後は維持し続

けているところです。二〇〇〇年代の五十九作、二〇一〇年代の五十八作と減らないところがすごい。現在に至るまで作り続けられ、安定的に推移しているのが、清張のテレビドラマのアダプテーションの特色です。

川端康成と比べると顕著です。川端の場合、六〇年代には増えますが、だいたい一桁です。これは川端が純文学作家として捉えられていることもあるでしょうし、清張文学の持つ力が活字媒体だけではなく、映画やテレビドラマと親和性があつたことも要因だと思えます。川端作品のテレビドラマも現在まで作られています。二〇〇〇年代以降一桁それもわずかに五作で、松本清張と比べると、歴然とした差が出ています。

ロサンゼルスで映画「張込み」のスクリーンングを行いました。この作品は頻繁にテレビドラマ化もされています。テレビドラマのコンテンツとして、とても魅力的だつたことが分かります。

テレビドラマ化の回数を整理すると、六〇年代、八〇年代に山を作りますが、大体五十から六十作で安定的に減らないという特徴が見られます。

注：小野芳美氏（北九州市立文学館）の調査によれば、データベース掲載作品以外にも、六〇年代には四作品、七〇年代、九〇年代には一作品ずつがテレビドラマ化。

映画・テレビドラマ化の比較

松本清張原作の映画化、テレビドラマ化の回数をグラフにすると、八〇年代にテレビドラマの作品数が映画を追い抜きますが、だいたい似た形の折れ線を描きます。

清張の文学は書物だけではなく、映画やテレビドラマを通じて多くの人に共有されていく。だから清張は忘れられずに読まれる。映画化されなくなってもテレビドラマ化が維持されることで、清張の名前が若い人たちに伝わっていることが想像されます。これも特徴の一つです。

贈呈です。

そして、松本清張記念館は北九州市がすばらしいスペースを準備してバックアップし、現在まで二十年以上にわたって維持されている。清張の文学が衰退することなく、むしろ亡くなってから現在に至るまで多くの人たちに共有される重要な基盤をこの記念館が作っているのです。

今、文学の置かれる状況はたいへん厳しくなっています。その中で、出版社や北九州市が直営する松本清張記念館のような施設は、文学の振興に大きな力を持つようになるといいでしょう。状況は今後ますます厳しくなっていくでしょうから、このことは改めて強調しておく必要があります。

中国における松本清張の読者

もう一つ提出した視点は、北米でもあまり読まれない清張が、東アジアではかなり読まれているということです。一例として、王成氏（清華大学教授）の「越境する一大

試みに松本清張の所得金額と納税順位を調べたところ非常に高いレベルで推移しており、これには原作映画の制作が深く関わっていることが分かりました。

全集・文学賞・文学館の機能

私がシンポジウムでもう一つ強調したかったのは、全集、文学賞、文学館の機能についてです。とても重要な視点ですが、まだきちんとした研究がなされていないため、問題提起した次第です。松本清張と先に触れたBIG3、谷崎、川端、三島の例を挙げました。

それぞれ、①全集、②文学賞、③文学館のかたちで整理すると次のようになります。

- 松本清張
- ① 『松本清張全集』(文藝春秋)
- ② 松本清張賞(日本文学振興会・文藝春秋)
- ③ 松本清張記念館(北九州市) ※一九九

八年八月開館

谷崎潤一郎

- ① 『谷崎潤一郎全集』(中央公論新社)
- ② 谷崎潤一郎賞(中央公論新社)
- ③ 谷崎潤一郎記念館(倉庫市) 川端康成

① 『川端康成全集』(新潮社)

② 川端康成文学賞(新潮社) ※二〇一九年中止、二〇二二年再開

③ 川端康成文学館(茨木市)

三島由紀夫

① 『三島由紀夫全集』(新潮社)

② 三島由紀夫賞(新潮社)

③ 三島由紀夫文学館(山中湖村)

やはり全集がきちんとした出版社から刊行され、名前を冠した文学賞があるというのはかなり大事なことでないでしょうか。

例えば、『松本清張全集』は文藝春秋から刊行されています。藤井康栄名誉館長が力を尽くされ、すばらしい全集が作られました。『松本清張賞』は日本文学振興会の

衆文学」の力——中国における松本清張文学の受容」(『世界の日本研究2015』二〇一六年五月)を挙げました。王成氏の巧みな整理によって、清張の文学が東アジア圏でかなり享受されていることが、北米やヨーロッパの方々にも伝わりました。

「帝国主義や資本主義を批判した作品として、イデオロギーが先行する当時の中国の読者にも愛読された」という点、「中国の読者が清張小説から時代の落差を感じないのは、一九九〇年代以来の中国社会に高度成長の日本と似たところが多く見られるようになったからであろう」という点など、的確な指摘です。これらが、清張文学を享受する東アジアの基盤を作ったのだらうと考えます。これは重要な視点なので、シンポジウムで伝えることができて良かったのです。

結

松本清張は高度経済成長とともに日本国

内で人気作家となりました。文学出版の普及が清張の文学を押し上げていく。そこに映画化、テレビドラマ化、そしてツーリズムが関わります。

没後も松本清張記念館が中心となり、松本清張の文学の振興に力を尽くす。文学の置かれる状況が厳しくなっている今こそ、出版社や北九州市、あるいは松本清張記念館のような文学館の役割が文学の振興に大きな力を持つようになるだろうと思います。

日本国内で文学の読者数が減少しても、清張文学は東アジアを中心に人気を維持しているということを示し、私の報告を終わります。

(とえだ ひろかず・早稲田大学文学芸術院教授、早稲田大学国際文学館「村上春樹ライブラリー」館長)

二〇二二年十一月四日 松本清張研究会 第四十二回研究発表会

編集協力：大木エリカ、西岡亜希子